

# 『自然論』の構造

難波三郎

昭和50年9月16日受理

はじめに

- I. Pragmatism 的自然観
  - II. 東洋的思想
    - 1. 老荘思想に通ずるもの
    - 2. Upaniṣad の哲学に類似した思想
    - 3. 仏教的思想
  - III. Reason
- むすび  
Résumé

## はじめに

R. W. Emerson (1803~1882) は、周知のように、アメリカの産んだ最も偉大な思想家であり、アメリカにおいて初めて東洋思想を身につけたとも言われている。そのエマソンの『自然論』(Nature, 1836) は、40頁たらずの小冊子ながら、構想がねられてから出版されるまでに3年の月日を要しており、彼はこの著書に心血をそそいだと言われるだけあって、密度の高い作品であり、彼の代表作である。同時に、それはアメリカ文学の源的存在でもある。

そして、その『自然論』は直感に基づく思想を散文詩的文体で表現しており、これを論理的に論じてゆくことはもともと困難であると言われている。

こうした『自然論』に関して、以前、私は或る論叢に小論を書いた。その小論では、『自然論』は散文詩とも言える表現による様々な思想の複合体であることを明らかにした。その後、さらに精密に『自然論』を考察してみて、『自然論』の思想的構造の究明を試みしてみたのがこの小論である。

## I. Pragmatism 的自然観

『自然論』の主として前半において、エマソンは自然を人間にとっての効用を有するものとして実用的にとらえている。すなわち自然のもつ効用を、「物品」、「美」、「言語」、「訓練」という4つの分類を用いて説いているのである。

先ず、「物品」では、次の如く述べる。

Under the general name of commodity, I rank all those advantages which our senses owe to nature. .... Beasts, fire, water, stones, and corn, serve him. .... Nature, in its ministry to man, is not only the material, but is also the process and the result. All the parts incessantly work into each other's hands for the profit of man.<sup>1)</sup>

これは、人間に仕える〈物〉として自然を観る思想を表現しているが、こうした思想は、やがて人間が他の人間をも物（手段）として観る思想を生むことになる危険性を内包してはいないだろうか。

エマソンは、さらに、

The useful arts are reproductions or new combinations by the wit of man, of the same natural benefactors. ...<sup>2)</sup>

と述べて、人工化——文明を賞賛するのであるが、こうした思想が、前述の自然を物と観る思想と相俟って、アメリカ文明の発展（非人間化の増大を伴いながら）の思想的原動力となっていくのだと言えれば過言であろうか。

次の「美」の効用では、美の諸相が三つに分類されている。第1のものは、誰もが自然の姿に美を感じるものだが、このような美は「美のうちで最も小さな部分である<sup>3)</sup>」とエマソンは言い、美を完全なものにするには、もっと崇高な精神的要素が加わることが必要で、そうした崇高な美は、人間の意志と結合したところに生ずるものであり、美は神が徳の上につけるマークである、<sup>4)</sup>と述べる。さらに、人はその思想と意志の力に応じて世界を自分のものにすると同時に、そうした思想と意志の力に基づく真実の行為・英雄的な行為に応じて、自然が人間を美しく飾りたててくれるのだ、<sup>5)</sup>と説いている。ここにはエマソンの道徳重視の姿勢がみられるが、自然との関係においては、自然を人間の道徳的行為を飾る道具とみなしており、これは広い意味においてプラグマティズム的自然観だと言えよう。

三番目の美として、美が知性の対象となる場合をあげている。その中で、「自然の美は人間の心のうちに美を再現するが、それは実を結ばぬ黙想のためではなく、新しい創造のためである<sup>6)</sup>」と述べ、「美の創造は芸術である<sup>7)</sup>」と語る。そして、自然は美の基準を人間に示すという効用も有している、ということが次の文章から読み取れる。

The standard of beauty is the entire circuit of natural forms,—the totality of nature; which the Italians expressed by defining beauty “*il piu nell' uno.*” Nothing is quite beautiful alone: nothing but is beautiful in the whole. A single object is only so far beautiful as it suggests this universal grace.<sup>8)</sup>

エマソンは又、自然は人間の精神が美を欲求することに対して、この欲求を満たすために存在している、と観るのである：——

The world thus exists to the soul to satisfy the desire of beauty. This element I call an ultimate end. No reason can be asked or given why the soul seeks beauty. Beauty, in its largest and profoundest sense, is one expression for the universe. God is the all-fair. Truth, and goodness, and beauty, are but different faces of the same All.<sup>9)</sup>

この最後の単語 'All' は神を意味していると読める。そうすると、この場合、美は神の一面を表わしていることになり、最初の文は次の二つのことを内包していると言えるであろう。

- (1) 世界は人間のために存在している。
- (2) それも、人間の魂の美（一神）への欲求を満足させるために存在している。

ここに、エマソンの精神的な人間中心主義の世界観があらわれている、と同時に、これはプラグマティズム的世界観でもあると言える。それは、人間の魂に対する世界の効用という点において、である。

自然の第三の効用である「言語」に関して、

Words are signs of natural facts. The use of natural history is to give us aid in supernatural history: the use of the outer creation, to give us language for the beings and changes of the inward creation. Every word which is used to express a moral or intellectual fact, if traced to its root, is found to be borrowed from some material appearance.<sup>10)</sup>

と述べて、言語に対する自然の効用を説いている。これは、また、言葉を自然における外的実在に帰するエマソンの言語観を表明したものである。さらに、これは言語の象徴的機能についての考察でもあるが、こうした象徴性をそなえているのは言葉のみではなくて、自然の事実そのものが凡てある精神的な事実の象徴なのである、と次の如く説いている。

Every natural fact is a symbol of some spiritual fact. Every appearance in nature corresponds to some state of the mind, and that state of the mind can only be described by presenting that natural appearance as its picture. An enraged man is a lion, a cunning man is a fox, a firm man is a rock, a learned man is a torch.<sup>11)</sup>

また、これは自然と精神とは対応関係にある、という思想を表わしている。こうした対応の思想は、エマソンの特徴的な思想であり、彼の第1回ヨーロッパ旅行（1832年12月25日～1833年10月9日）におけるパリ動植物園で実感されたもので、彼の1833年7月13日の日記に、次の様に書かれているものである。

「…この驚くべき生物の行列——霞のような蝶、彫刻のような貝、鳥、獣、魚、昆虫、蛇——を、また、あらゆる所に、例えば有機体の形をまねた岩のなかにも、未発達の状態でひそんでいる成生の原理を、ひとつたり見物してまわると、宇宙は今までよりも、さらに驚くべき謎のように思われてくる。あれほど奇怪な、または野蛮な、または美し

い形のものでも、ひとつとして観覧者たる人間に内在する或る属性の表現でないものはない。——あのサソリと人間との間にさえ、なにか神秘的な関係がある。私は、自分のなかにムカデがいるのを感じる——南米のワニが、鯉が、鷺が、キツネがいるのを感じる。私は、不思議な共感に動かされる…<sup>12)</sup>」

この対応の思想は、この時初めて直感によって得たものではなく、1826年に、アメリカのスウェーデンボルグ主義者の Sampson Reed によって書かれた『精神の成長』 (*The Growth of the Mind*, 1826) というパンフレットを読んで、エマソンは Swedenborg の対応の思想を知ったのであった。<sup>13)</sup> その後、ずっと、この思想はエマソンの胸のうちにあたためられて7年、見事、パリ動植物園で体験され実感されたのである。そうした対応の思想は、『自然論』において、「特定の自然の事実は、特定の精神的事実の象徴である<sup>14)</sup>」という個々の事実の対応関係から、さらに発展して、世界全体が象徴として存在しており、自然全体が人間精神の隠喩なのである、と次の様に述べている。

The world is emblematic. Parts of speech are metaphors, because the whole of nature is a metaphor of the human mind. The laws of moral nature answer to those of matter as face to face in a glass.<sup>15)</sup>

このように、エマソンは自然の象徴性を説くのだが、この考えは「自然は思想を伝える<sup>16)</sup>」という効用を人間に対してもっている、という考えを内包している。この点において、「自然の象徴性」という考え方も、プラグマティズム的自然観の内に入れてさしつかえあるまい。

自然を実用的にとらえる論述の最後に、エマソンは、これまでに述べてきた自然の効用も含めて自然は訓練であり、人間の「悟性」と「理性」の両方を教育する、と説くのである。

まず、自然は「悟性」(Understanding) を教育する、と次の如く語る。

Every property of matter is a school for the understanding,—its solidity or resistance, its inertia, its extension, its figure, its divisibility. …… Nature is a discipline of the understanding in intellectual truths.<sup>17)</sup>

また、自然が「理性」(Reason) を訓練する点に関しては、

A leaf, a drop, a crystal, a moment of time is related to the whole, and partakes of the perfection of the whole. Each particle is a microcosm, and faithfully renders the likeness of the world.<sup>18)</sup>

と述べている。これは、「自然の全体性」の暗示であり、このように個々の自然が自然の全体性を暗示しているとみる自然観は、プラグマティズム的自然観から東洋的思想への橋(通路)をなすものであると言えるであろう。

## II. 東洋的思想

### 1. 老荘思想に通ずるもの

The stars awaken a certain reverence, because, though always present, they are inaccessible; but all natural objects make a kindred impression, when the mind is open to their influence. Nature never wears a mean appearance. Neither does the wisest man extort her secret, and lose his curiosity by finding out all her perfection.<sup>19)</sup>

これは、天地大自然の理法の絶対性と無限性を示唆したもののだが、こうした思想は、『老子』<sup>20)</sup>、『莊子』<sup>21)</sup>の底に共通して流れているものでもある。この様な天地自然の偉大さに刮目すれば、人はおのずからそうした自然をわが師と見做すことになる：――

All things with which we deal, preach to us. What is a farm but a mute gospel?.....Who can guess how much firmness the sea-beaten rock has taught the fisherman?<sup>22)</sup>

これは、自然を人間の偉大な教師として観る姿勢において、次に示す『老子』のことばと共通するものを有している。

上善は水の若し。水は善く万物を利して争わず、衆人の悪む所に処る。故に道に幾し。<sup>23)</sup>

ここに、老子は「水に学べ。水は他に恵みを与えはするが常に低きに就いて他と争うことはしないではないか。水はなぜそうなのかと言え、水は人間のような作為の心をもたず、愛の感情も智の働きももたないで、水はただ無心無欲であり無為自然であるからだ。いったい人間は、知ることから欲望がかきたてられ、かきたてられた欲望を互いに満たそうとして、競争・抗争・戦争といった争いを生んでいるのだ。だから、人間も、水の如く、無知無欲、無心虚心、無為自然となることが最善なのだ」<sup>24)</sup>と説いているのである。こうした無為自然なものとしての嬰兒に学べとも老子は語るのだ：――

其の雄を知りて、其の雌を守れば、天下の谿と為る。天下の谿と為れば、常德離れず、嬰兒に復帰す。<sup>25)</sup>

このように、老子は嬰兒の純真さを高く評価しているが、この点においても、『自然論』に共通するものがある：――

To speak truly, few adult persons can see nature. Most persons do not see the sun. At least they have a very superficial seeing. The sun illuminates only the eye of the man, but shines into the eye and the heart of the child. The lover of nature is he whose inward and outward senses are still truly adjusted to each other; who has retained the spirit of infancy even into the era of manhood. His intercourse with heaven and earth becomes part of his daily food.<sup>26)</sup>

ところで、以上の如き、天地大自然の偉大さに憧憬し、それを人間の師と仰ぎ、嬰兒の無為自然を範とする、そうした思想の『自然論』における比重が、『老子』『莊子』におけるそれに比べて、はるかに小さいのは、なぜであろうか。——それは、エマソンが、老子や莊子ほどには、人間の醜さと愚かさ、卑屈さと驕慢さ、悲しさとおかしさを知りぬき、人の世の暗さと陰しさ、傷つき易さとくつがえり易さを味わいつくしてはいなかったからではないだろうか。

## 2. Upaniṣad の哲学に類似した思想

We learn that the highest is present to the soul of man, that the dread universal essence, which is not wisdom, or love, or beauty, or power, but all in one, and each entirely, is that for which all things exist, and that by which they are; ...<sup>27)</sup>

これは、次に示すヴェーダ聖典の最終部門をなすウパニシャッド（奥義書）の中にみられる文章と類似した思想表現であると言える。

まことに、この偉大な不生のアートマンは、認識から成り、諸機能に（その内部の光として）存在し、心臓の内部にある空処に休らっております。それはいっさいの統御者、いっさいの主宰者、いっさいの君主であります。<sup>28)</sup>

これは、個体の最高原理であり個体の本質であるアートマンに関して述べたものだが、こうした個体原理アートマンに人が己れの生活を合致させると、飢え、迷い、死さえ、超越するに至り、宇宙の最高原理ブラフマンに合一することになるのである：——

「飢えと渇き、憂い、迷い、老齡、死を超越するものである。実に、このアートマンを知って、婆羅門たちは、息子を得たいという願望、財産を得たいという願望、（天上の）世界を得たいという願望から離脱して、<sup>コツンキ</sup>乞食の遊行生活をするのである。……それゆえに婆羅門は、識者であることをわずらわしく感じて、愚者の状態に生きようとするべきである。愚者であることをも識者であることをもいとうとき、彼は聖者となる。聖者でないことをも聖者であることをもいとうとき、彼は（真の）婆羅門（すなわち、宇宙の最高原理ブラフマンに合一した人）となるのである」<sup>29)</sup>

これは、アートマンとブラフマンとの合一を説く思想表現であるが、これに類似した思想が『自然論』の最後を飾る文章に見られるのである：——

As fast as you conform your life to the pure idea in your mind, that will unfold its great proportions. .... The kingdom of man over nature, which cometh not with observation —— a dominion such as now is beyond his dream of God —— he shall enter without more wonder than the blind man feels who is gradually restored to perfect sight.<sup>30)</sup>

さらに、そうした思想は『自然論』の要とも言える第6章にも表現されている：——

Yet all men are capable of being raised by piety or by passion, into their region. .... No man fears age or misfortune or death, in their serene company, for he is transported out of the district of change. .... We become immortal,...<sup>31)</sup>

そうしたブラフマン（梵）とアートマン（我）との神秘的同一化——「梵我一如」——を説くのがウパニシャッド哲学の核心であると言われ、この「梵我一如」という思想を成立させたのは宇宙（自然）を構成する諸要素と人間の諸機能とが等質的な対応関係にあるという思想であったと言われている。例えば、人間の眼（視覚機能）は太陽に、口（発声機能）は火に、鼻（嗅覚機能）は風に、対応させられており、人間が死ぬと、彼の諸機能はそれぞれ対応する自然界（宇宙）の要素の中に解消するというのである。<sup>32)</sup>

### 3. 仏教的思想

前述のウパニシャッドにおいては、アートマン（我・靈魂）が、各人の業を担っていく基本であり、前生から来世につづく輪廻の主体になるのであるが、仏教では、アートマンが輪廻するのではなくて、人間のつくりだす業が輪廻するという。では、なぜ輪廻が起こるかと言えば、それは有我、つまり我に執着しているからだ、と仏教では言い、それで輪廻から解脱するために、アートマン（我）を否定して無我を説くわけである。

なお、ウパニシャッドでは、未だ、輪廻からの解脱という思想は明確ではなかったようだ。

ところで、アートマンの思想がバラモンの世界では絶対的であったなかで、仏教が無我を説いたのは革命的なものであったろうといわれている。<sup>33)</sup>

『自然論』にも、そうした無我の境地を示そうとしたものがある：——

Standing on the bare ground ——my head bathed by the blithe air, and uplifted into infinite space—— all mean egotism vanishes. I become a transparent eye-ball; I am nothing; I see all; the currents of the Universal Being circulate through me; I am part or parcel of God.<sup>34)</sup>

これはまた次に示す仏教の経典の中のことと相通ずるところがある。

内と外とに、「われ」もなく「わがもの」もなければ、執着は滅し、この滅によりて再生も尽きる。……それが実に解脱というものである。<sup>35)</sup>

### III. Reason

『自然論』に内包されている数多くの思想も、Iのプラグマティズム的自然観とIIの東洋的思想とに集約できるのであるが、ではこれら二つの関係は、『自然論』の構造上、いかなるものであろうか。それは次の文章が示唆しているといえよう。

To the senses and the unrenewed understanding belongs a sort of instinctive belief in the absolute existence of nature. .... Things are ultimates, and they never look beyond their sphere. The presence of reason mars this faith. .... Until this higher agency intervened, the animal eye sees, with wonderful accuracy, sharp outlines and coloured surfaces. When the eye of Reason opens, to outline and surface are at once added grace and expression. .... If the Reason be stimulated to more earnest vision, outlines and surfaces become transparent, and are no longer seen; causes and spirits are seen through them. The best moments of life are these delicious awakenings of the higher powers, and the reverential withdrawing of nature before its God.<sup>36)</sup>

この文章と、さらに次の表現においても、Reason というものが、プラグマティズム的自然観から東洋的思想への止揚を可能ならしめていることが読みとれる。

In the woods too, a man casts off his years, as the snake his slough, and at what period soever of life, is always a child. .... In the woods, we return to reason and faith. There I feel that nothing can befall me in life—no disgrace, no calamity (leaving me my eyes), which nature cannot repair.<sup>37)</sup>

ではそうした Reason とは、一体いかなるものであろうか。次の文章が、この問いに答えてくれるであろう。

Man is conscious of a universal soul within or behind his individual life, wherein, as in a firmament, the natures of Justice, Truth, Love, Freedom, arise and shine. This universal soul, he calls Reason: it is not mine, or thine, or his, but we are its; we are its property and men.<sup>38)</sup>

Reason とは、そうした普遍的な魂のことだと、ここでは語っているが、Reason に関する言及は、このほかに『自然論』のいたる所にみられる。それらによると、エマソンの言う Reason は、18世紀合理主義の理性とは全く異質のものである。18世紀合理主義の理性は、エマソンの言う「悟性」(Understanding)にあたるものであり、対象を分析したり測定したりして、対象を明晰にとらえることをめざすもので、エマソンはこれを感じとることに、ものの表面しか見ることの出来ない能力だとして軽視している。これに対して、エマソンの言う Reason とは、凡ての部分を総合することの出来る内的な力、すなわち、全体を一つとして把握する内的な認識能力のことであり、「直観」(Intuition)<sup>39)</sup>であり、誰もが生まれながらにしてもっている真の英知のことである。

## む す び

『自然論』に内包されている多くの思想は、実は、プラグマティズム的自然観と東洋的思想とに集約されるのであり、さらに、Reason なるものが、前者から後者への止揚を可能にしているのである。こうしたことがこの小論において究明された。

## 注

- 1) Ralph Waldo Emerson: *Nature, The Conduct of Life and Other Essays* (Everyman's Library, 1970), p. 5.
- 2) *Ibid.*, p. 5.
- 3) *Ibid.*, p. 8.
- 4) *Ibid.*, p. 9.
- 5) *Ibid.*, pp. 9~10.
- 6) *Ibid.*, p. 10.
- 7) *Ibid.*, p. 10.
- 8) *Ibid.*, p. 11.
- 9) *Ibid.*, p. 11.
- 10) *Ibid.*, pp. 11~12.
- 11) *Ibid.*, p. 12.
- 12) William H. Gilman and others (ed.): *The journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson* (Harvard Univ. Press, 1964), Vol. IV, pp. 199~200.
- 13) 斎藤光『エマソン』(研究社, 1969.), 34~45頁。
- 14) Emerson: *Nature, op. cit.*, p. 11.
- 15) *Ibid.*, p. 15.
- 16) *Ibid.*, p. 11.
- 17) *Ibid.*, p. 17.
- 18) *Ibid.*, p. 21.
- 19) *Ibid.*, p. 3.
- 20) 福永光司『老子』(朝日新聞社, 1973.)
- 21) 福永光司『莊子』(朝日新聞社, 1973.)
- 22) Emerson: *Nature, op. cit.*, p. 20.
- 23) 福永『老子』, 第8章。
- 24) 同, 45~49頁。
- 25) 同, 第28章。
- 26) Emerson: *Nature, op. cit.*, p. 3.
- 27) *Ibid.*, p. 31.
- 28) 長尾雅人『バラモン教典・原始仏典』(中央公論社, 1974.), 101頁。
- 29) 同, 68頁。
- 30) Emerson: *Nature, op. cit.*, p. 38.
- 31) *Ibid.*, p. 28.
- 32) 長尾『バラモン教典・原始仏典』, 19~23頁。
- 33) 同, 付録「古代インド思想の展開」
- 34) Emerson: *Nature, op. cit.*, p. 4.
- 35) 長尾雅人『大乘仏典』(中央公論社, 同), 311頁。
- 36) Emerson: *Nature, op. cit.*, p. 24.
- 37) *Ibid.*, p. 4.
- 38) *Ibid.*, p. 12.
- 39) Emerson: *Self-Reliance and Other Essays* (Tokyo, Kenkyusha, 1972), p. 42.

*A Study of the Structure of Nature*

Saburo NAMBA

**Résumé**

Many ideas which are expressed in *Nature* by Ralph Waldo Emerson can be summarized into both pragmatic views of nature and Oriental thoughts. Moreover it is 'Reason' that makes possible the sublimation of his ideas from the former to the latter in *Nature*. This paper is intended to bring it to light.